# UrbanDesignLab.Magazine

都市デザイン研究室マガジン

vol. 287 /
Dec. 31st 2019

12

## 海原を拓く道標

*Compass to Guide us through the Cradle of the Deep*

北沢猛先生がこの世を旅立たれてから 10 年が経った。
先生の遺伝子を受け継いだ我々は、
この 10 年でどこまで前に進めたのか。
今号では、先生の 10 回忌に開催された
「北沢猛に都市の未来を語る会」について特集する。

—Contents

P2　「北沢猛に都市の未来を語る会」
P2-3　都市デザイナーとしての功績
P4-7　21 人が語る都市の未来
p8　それぞれの “今年の一枚”、Infomation

# 「北沢猛に都市の未来を語る会」

*The Meeting Talking about the Future of Urban Design to Takeru Kitazawa.*

text_MUNENO / M1

横浜市において都市デザインの新たな領域を切り開いた都市デザイナーであり、都市デザイン研究室の助教授、そして新領域創成研究科の教授を務めた研究者・教育者である北沢猛先生。「北沢猛に都市の未来を語る会」は、先生がこの世を旅立たれてから 10 年の節目となる 2019 年 12 月 22 日に開催された。会場は、みなとみらい線新高島駅の地下にある BankART Station。北沢先生が深く関わった、横浜市の創造都市の取り組みによって生み出された拠点である。会場には北沢先生にゆかりのあるおよそ 150 名が足を運び、彼の功績や自身の 10 年間、先生に今だからこそ伝えたいことについて語り合った。

会は大きく 2 部で構成された。1 部では、Pechakucha night 方式で各テーマごとにショートトークリレーを開催。2 部の懇親会は、参加者どうしが自由に語り合う場となり、盛り上がりを見せた。

※ Pechakucha night 方式：スライド 1 枚あたり 20 秒で行うプレゼンテーションの方式

会場の様子（BankART Station）

# 都市デザイナーとしての功績

*His Achivement as an Urban Designer.*

text_MUNENO / M1

北沢先生は、東京大学都市工学科を卒業後、横浜市へ入庁。途中、大学に活躍の場を移しながら、都市デザイナーとして数多くの功績を残した。
まずは、年表と地図を用いてその功績を整理し、活躍の全体像をお伝えする。

**1977 横浜市入庁**

1978 郊外部歩行者空間検討調査
1979 区の魅力づくり基本調査
1980 横浜駅東口設計
1981 『港町横浜の都市形成史』
1982 開港広場整備（公園広場の初適用）
金沢シーサイドタウン計画・デザイン調整
歴史的環境保全整備構想
1983 『都市デザイン白書』
『都市の記憶・土木遺産編』
1985 水と緑のまちづくり基本構想策定
磯子アベニュー整備計画
1986 アーバンデザイン研究体（UDM）発足
夜景演出・ライトアップ横浜開始
『ある都市のれきし - 横浜・330 年 -』
1987 エリスマン邸移築復元
創造実験都市横浜会議「横浜都市デザイン宣言」
1988 歴史を生かしたまちづくり要綱
横浜市歴史的資産調査会発足
1989 日本興亜馬車道ビル認定
旧横浜船渠第２号ドック認定
都市デザイン交流宣言
外交官の家移築復元方針
1990 バルセロナ＆ヨコハマシティクリエーション
国際都市創造会議
山手まちづくり構想立案
川辺公園親水広場整備計画
1991 『都市の記憶・近代建築編』
1992 ヨコハマ・アーバンリング展
第１回ヨコハマ都市デザインフォーラム
『都市デザイン 横浜その発想と展開』
1994 UDM 通巻４号発行
金沢ハイテクセンター・金沢広場
阪神淡路大震災応援業務

**1995 横浜市 都市デザイン室長**

旧第一銀行横浜支店曳家事業
日本大通り再整備構想策定
1996 『都市の記憶・近代建築Ⅱ』

**1997 東京大学大学院 都市デザイン研究室 助教授**

重要伝統的建造物群保存地区調査（宿根木・熊川宿）
岩手県久慈市中心市街地調査
外交官の家移築復元
1998 釜石プロジェクト
任意団体「この会」活動開始
ブータン集落調査
東京ビジョン研究会
1999 アメリカ・アーバンデザイン調査
2000 岩手県釜石市まちづくり
アーバンデザイン研究体（UDM）会長
2001 大野村調査
岩手県岩泉町プロジェクト
小田原市板橋宿地区調査＋「蔵かふぇ」開催
2002 横浜市参与
喜多方調査
『都市のデザインマネジメント』
2004 岩泉町中心市街地整備基本計画
中国新都市計画国際設計競技 最優秀賞受賞
21 世紀 CEO「京浜臨海部再生アクションスタディ」
文化芸術創造都市・クリエイティブシティ横浜構想
横浜市ナショナルアートパーク構想推進委員会委員長
BankART1929 オープン

**2005 東京大学大学院 空間計画研究室 教授**

アーバンデザイン研究体（UDM）理事長
2006 柏の葉国際キャンパスタウン構想策定
横浜市創造都市横浜推進委員会副委員長
柏の葉イノベーション・デザイン研究機構機構長
福島県田村市中心市街地まちづくり基本方針
舞鶴プロジェクト
2007 UDCY 横浜アーバンデザイン研究機構代表
UDCT 田村地域デザインセンター長
UDCKo NPO 郡山アーバンデザインセンター長・理事
2008 田村市中心市街地まちづくり基本計画
田村市滝根地区まちづくり基本方針
日本ナショナルトラスト理事
海都横浜構想 2059
田村市大越地区まちづくり基本方針
柏の葉コミュニティグリッド
- 持続可能な空間計画と社会運営のシステム試案
2009 アーバンデザインセンター会議

横浜の都市デザイン
歴史を生かしたまちづくり
インナーハーバー
創造都市の取り組み
地方プロジェクト
大学での都市教育
UDC の展開
横浜の都市デザイン

インナーハーバー
横浜駅東口
BankART Station
旧横浜船渠第２号ドック
（現ドックヤードガーデン）
旧第一銀行横浜支店
（現 YCC ヨコハマ創造都市センター）
日本興亜馬車道ビル
日本大通り
開港広場
エリスマン邸
外交官の家
金沢シーサイドタウン
久慈市
旧大野村
岩泉町
釜石市
岩手県
喜多方市
田村市
福島県
千葉県柏市

# 21 人が語る都市の未来

*Future of Urban Design Talked by 21 People.*

text_MUNENO / M1

「北沢猛に都市の未来を語る会」の第１部ではショートリレートークが行われた。ショートリレートークでは、７つのテーマについて、先生の功績を振り返りつつ、登壇者それぞれのこの 10 年間での活動について先生に語られた。７つのテーマとは、「横浜の都市デザイン」「歴史を生かしたまちづくり」「インナーハーバー」「創造都市の取り組み」「大学での都市教育」「地方プロジェクト、その後」「UDC の展開」である。ここでは、テーマごとに登壇者のお話の内容から伺えた、北沢先生の考え方や、先生が蒔いた種の今後の展開についてご紹介する。

## セッション１　横浜市の都市デザイン

語り手：国吉直行氏、土井一成氏、梶山祐実氏

北沢先生は 1977 年に横浜市に入庁し、都市デザインチームに加わった。はじめの数年間は、区の魅力づくり基本調査や、横浜駅東口駅前広場などを担当。その後、歴史を生かしたまちづくりの政策立案や一連のプロジェクト、市街地環境設計制度の改正や国際会議の開催などで中心的な役割を果たし、その活躍は横浜市の枠を超えて広がっていく。1995 年から都市デザイン室長をつとめたのち、1997 年には母校である東京大学の工学部都市工学科の助教授として赴任し、その活躍の場を移した。しかし、その後も横浜とのつながりは強く、2002 年には横浜市の参与となり、当時の中田市政の都市デザイン分野のブレーンとして活躍。2004 年の文化芸術創造都市・クリエイティブシティ横浜構想においては中心的な役割を果たし、都市デザイン室時代に検討していた新たな展開を模索していく。2009 年の開港 150 周年の際には、海都横浜構想 2059 を発表するが、これらは、1992 年のアーバンリング展や、創造都市構想の延長にあるものと考えられ、横浜での仕事の集大成ともいうべきものであった。セッション１では、北沢先生とともに横浜市でご活躍された国吉氏、土井氏と、現在横浜市に務められている梶山氏が語り手を務めた。

### - 都市デザインは運動である

北沢先生が横浜市の都市デザイン室に加わったのは、ちょうど田村明氏が率いた横浜市の都市デザイン活動が萌芽期を終え、次のステージへ進むタイミングであった。都市デザインは運動であるから、常に動き続けなければならない。そこでそれぞれ好きなことをしようという話になり、北沢先生は広場と歴史的な建造物がセットになったものの整備やシーサイドタウンの第２期の整備をした。田村氏が都市デザイン室を抜けて精神的なバックアップがなくなっていた時代に、新しいキーワードを入れていかなければならないということを北沢先生は強く主張していた。

左から、梶山氏、土井氏、国吉氏

今後も運動体としての都市デザイン室が次の運動をどうするか、ということを常に考えていかなければならない。

### - 時間・空間・生活の３つの軸のバランス

北沢先生は、都市デザインにおいて、空間だけを扱ってはダメで、時間軸と空間軸、そして生活軸（人間軸）をバランスさせるのが我々の仕事であると語っていた。時間軸とは歴史や過去･現在･未来、空間軸は建築・都市・道路をはじめとした公共空間、生活軸は生活・文化・産業、創造都市を含む概念であると思われる。先生は、市役所内外の様々な分野人と付き合う中で、その３軸を見ていた。ほとんどの局の人とビジョンを描こうという話をして、それらを調整したまとめていた。北沢先生と一緒に仕事をすると、ファンになってしまう。人を巻き込む力において圧倒的なものがあった。

### - 政策として位置付けること

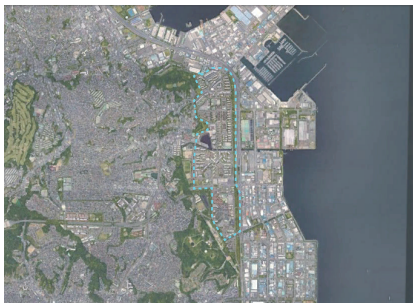
北沢先生は、ナショナルアートパーク構想をはじめとして、都市デザインの諸活動を政策として位置付けることを重要視していた。近年、横浜市の現庁舎・新市庁舎のエリアコンセプトブックを作成した。そこでは横浜市としてどうしていきたいか、という方針と具体的なビジョンを政策として位置付けた上で、民間からの新しいアイデアを提案してもらっている。この、政策として位置付けた上で活動を推進していくという進め方は北沢先生の流れを汲んだものである。

### - 横浜の都市デザインの現在とこれから

東横線桜木町駅 - 横浜駅間の廃線跡地を遊歩道にするプロジェクトが完了し、そこでピクニックをする実証実験を行った。この廃線跡地活用は、北沢先生がナショナルアートパーク構想として位置付けていたもので、10 年越しに実現した。

横浜市の都市デザインにおいては、郊外における人口減少への対応など、多くの課題がある。他の部署を巻き込んで先導しつつ、北沢先生が得意であった、想像できないものを創造するということを続けていき、常に運動体でありたい。

横浜駅東口駅前広場（出典：横浜市 HP）



金沢シーサイドタウン（出典：Google Earth）

現横浜市庁舎の保全活用

東横線廃線跡地におけるピクニックの実証実験
（出典：ヨコハマ経済新聞 HP）

## セッション２　歴史を生かしたまちづくり

語り手：嶋田昌子氏、米山淳一氏、菅考能氏

北沢先生が都市デザイン室に加わり、横浜の都市形成史調査を担当することになった。この成果は『港町横浜の都市形成史』としてまとめられ、その後の歴史を生かしたまちづくりの政策立案や、一連のプロジェクトに繋がっていく。数ある歴史的建造物の保全の中で、最初に取り組まれたのは、1987 年のエリスマン邸の移築復元である。エリスマン邸は山手地区のシンボルとして、現在も数多くの観光客を惹きつけている。1988 年に制定された「歴史を生かしたまちづくり要綱」では歴史的建造物の点的な保存に加え、面的に保全を推し進めることを提唱した。その後も、損保ジャパン日本興亜馬車道ビル、旧横浜船渠第２号ドック（現ドックヤードガーデン）の歴史的景観保全事業の認定、旧第一銀行横浜支店（現 YCC ヨコハマ創造都市センター）の曳家事業、外交官の家の移築復元など、横浜開港以来の歴史的建造物の保全を進めた。セッション２では、NPO 法人横浜シティガイド協会の嶋田氏、公益社団法人横浜歴史資産調査会（YOKOHAMA HERITAGE）の米山氏、山手総合計画研究所の菅氏が語り手を務めた。

「北沢猛に都市の未来を語る会」ポスター

### - 自らを横浜の都市デザインに捧げる

「歴史を生かしたまちづくり要綱」を策定するにあたり、歴史的景観都市連絡協会の仲間に相談をしていた。毎晩深夜に電話がかかってくるという時期もあった。「ナショナルトラストにできないことをやってやる。」「強い地方政府をつくるんだ。」 一見大きすぎる夢のようにも思えるが、それを実現する、有言実行の人であることが北沢先生の魅力であり、周囲の多くの人をその夢に巻き込んでいた。また、横浜をよくするための全国の都市の視察をする「この会」を立ち上げ、自費で仲間とともに旅をしていた。「北沢猛に都市の未来を語る会」のポスターに用いられているのは、富山県城端を訪れた時の写真。

移築復元されたエリスマン邸（出典：エリスマン邸公式サイト）

### - 歴史を生かしたまちづくりの裾野の広がり

近年、横浜市の歴史を生かしたまちづくりにおける保全対象が、戦前の歴史的建造物から戦後の建築物に広がってきている。例えば、東京オリンピックの頃に建てられた都橋商店街ビルが市の登録歴史的建造物となり、防火帯建築が芸術不動産事業の対象となっている。これまでは歴史的建造物について「保全活用」がされてきたが、現在は「活用保存」、つまり活用するということを前面に出している。さらには、現在、ヨコハマ市民まち普請事業という実験事業が行われている。この事業では地域に長く息づいてきた建物を、市民自身が交流の場などとして活用する取り組みを支援する。このように、歴史を生かしたまちづくりは、その対象と主体を広げつつ発展している。

登録歴史的建造物となった都橋商店街ビル

## セッション３　インナーハーバー

語り手：秋元康幸氏、鈴木伸治氏、山本理顕氏

インナーハーバーとは、横浜市における東京湾の内港とそれに面した都心臨海部のことを指す。内港とはおおよそ横浜ベイブリッジより内側かつ、JR 京浜東北・根岸線の海側のことである。インナーハーバーの地形は横浜の特徴であり資源であると捉え、これを生かしたリング状の都市デザインが提唱されてきた。1992 年に青山のスパイラルにて開催されたアーバンリング展では、伊東豊雄やレム・コールハースをはじめとした国内外の著名な建築家が招かれ、リング状都市に対する提案がされた。その後、横浜開港 150 周年の節目である 2009 年に、開港 200 周年の横浜の姿を描いた海都横浜構想 2059 では、港湾・物流機能が中心であるインナーハーバー地区を人間のための豊かな都心空間とすることが提案された。さらに、北沢先生が大学に戻られた後、2004 年には、東京大学 21 世紀 COE プログラムにおいて、京浜臨海部再生アクションスタディの取り組みがされた。

セッション３では、横浜市でアーバンリング展を担当された秋元氏、横浜市立大学教授の鈴木氏、山本理顕設計工場の山本氏が語り手を務めた。

### - 先を見据える力

インナーハーバーという概念が登場したのは、みなとみらい 21 が完成した頃のことである。完成に満足して足を止める暇なしに、北沢先生は「みなとみらい 21 の次をどうするか」ということを考えていた。そして、アーバンリング展企画の頃から、「実験都市」という言葉が使われ始めた。芸術家に都市の提案をさせ、ハードとともに、文化・芸術で都市を楽しくするという取り組みであるこの企画は、のちに脈々とつながる創造実験都市の取り組みのはじまりであると言える。

ヨコハマ・アーバンリング展

### - 社会正義としての都市づくり

北沢先生は「ものをつくる人」を大切にしていた。山本理顕氏をはじめとした数人の建築家を横浜市に呼び、公共建築の設計を任せていた。建築家を選ぶ基準は、社会正義をもって設計に向き合っているか、ということである。その考え方は、設計者選定の際に入札を絶対にしない、という現在の横浜市の姿勢に影響を与え続けている。

### - インナーハーバーの今後の展開

インナーハーバーで今後何をするのか、ということについて、建築家と建築学科の学生が考える企画「横浜の未来」が開催された。中心地の経済と居住の郊外という 20 世紀的なライフスタイルモデルが破綻している現状をどうするか。少子高齢化・人口減少が進む中で、全く新しい考え方で都市をデザインをしなければならない。

「横浜の未来」ポスター

海都横浜構想 2059　北沢先生自筆スケッチ

## セッション４　創造都市の取り組み

語り手：池田修氏、恵良隆二氏、杉崎栄介氏

横浜市の創造都市の取り組みは、都市に「創造力」を集積させることで、市民の生活の質、都市の価値を高めることを目的としている。創造的な人材が横浜に集まることで、新たな芸術や活動が生まれ、映像や音楽、デザインをはじめとするコンテンツ産業の集積へとつながり、さらに IT やメディア、出版やライフスタイル産業などが集積する。その取り組みは、BankART1929/NYK、東京藝術大学大学院の開設にはじまり、ナショナルアートパーク構想、創造界隈の形成、映像文化都市、横浜トリエンナーレの取り組みへと展開してきた。

セッション４では、BankART の代表である池田氏、横浜市芸術文化振興財団の恵良氏、杉崎氏が語り手を務めた。

### - まちに開くということ

北沢先生は公共建築物をまちに開くということを大切にしていた。神奈川芸術劇場の計画において、担当者に「１階はホールにしてはいけない、１階は誰もが自由に入れる場所にしなければならない」ということを常に主張していた。担当者は先生が旅立たれた後も、その教えを頑なに受け継いで、計画を進め続け、１階はアトリウムと NHK の放送会館に。誰でもアクセスできる空間となっている。先生の夢は生き続けている。

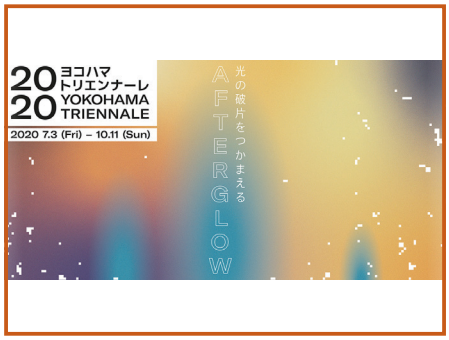
### - 将来は無理をして見なければならない

創造都市であり続けるためには、横浜の歴史的な文化の積み重ねの上で、時代時代で鮮度を失ってはいけない。ビジョンを定めた上で、プログラムを描いていくこと。「将来が見えない」という発言を耳にするが、将来は無理をしてでも見ないといけない。そこを忘れてはいけない。近年、旧都心である関内と新都心であるみなとみらいがつながってきている。その状況の中で、従来の概念を超えた取り組みができるはず。ウォーターフロント軸など既存の軸の見直しが必要なのかもしれない。

### - 創造都市ネットワークの広がり

2001 年の横浜トリエンナーレ開催時と現在の横浜の創造拠点の比較をすると、この 18 年間で拠点が増え、創造都市のネットワークが確実に広がっているということがわかる。横浜への創造の担い手の集積が進み、そのプラットフォームとしてのイベントも充実してきている。これは、１人の担当者がリードして実現したということではなく、既にある横浜の界隈性・内発性を生かして創造界隈としての横浜のあり方を引き出したということである。全ての市民がアーティスト、ということには当時反対も多かったが、創造性が専門家だけのものであるのではなく、誰にでも創造性を持たせる都市が創造都市である。都市は誰のものなのか。個人の尊厳を重視して、全体の中の個人ではなく、尊厳ある個人を丁寧に繋いでネットワークを広げていく。

BankART Studio NYK




ヨコハマトリエンナーレ 2020
（出典：ヨコハマトリエンナーレ 2020 HP）

## セッション５　大学での都市教育

語り手：西村幸夫氏、窪田亜矢氏、中島直人氏

横浜市の都市デザイン室長として手腕を振るっていた北沢先生は、1997 年に母校である東京大学都市工学科に助教授として戻ることになる。活動の拠点を大学に移した後は、横浜市のみならず、様々な都市のプロジェクトを手がけていく。また、その活動は海外にも広がり、1997 年のブータン集落調査や、2004 年の中国新都市計画国際設計競技での最優秀賞受賞などにつながっていく。2005 年には柏市にある東京大学大学院新領域創成研究科の教授となり、この頃から柏の葉キャンパス周辺のまちづくりへ参画。2006 年には UDCK センター長となり、公民学連携によるアーバンデザインの新しいかたちを実現させた。

セッション５では、都市デザイン研究室前教授の西村先生、都市デザイン研究室 OG であり東京大学地域デザイン研究室教授の窪田先生、都市デザイン研究室准教授の中島先生が語り手を務めた。

左から、野原氏（司会）、中島氏
窪田氏、西村氏

### - 自分のまちを持て

北沢先生は「自分のまちを持て」ということをよく言っていた。北沢先生にとっての自分のまちとは、いうまでもなく横浜と、故郷である喜多方である。１つの都市を深く掘り下げると、あらゆる都市に共通する不変の真理にたどり着けるのである。そのような意志をついでということかはわからないが、都市デザイン研究室で取り組んだプロジェクトの対象地に移り住んで、地域おこし協力隊として活躍している OB も出てきている。

岩手県大槌町での津波被災からの復興まちづくり PJ

### - 専門家の視点、住民の視点

北沢先生は住民の前に立つときには、頼もしい専門家としての立場と、住民とフラットな立場を両立できる人であった。現場で実践をしながら考えることで初めて計画ができる。現場を知らずにつくられた計画には、実際に計画災害を起こしているものがある。現場で考え続けながら、自分自身に対しても、社会に対しても既成概念を疑い続けることが必要である。

### - 都市デザイナーという肩書き

北沢先生は、名刺には「都市デザイナー」と書け、とよく言っていた。今後、行政とアカデミック、民間が行き来できる世界にしていかなければならない。都市デザインをやっているということは共通で、ただ働いている場所が異なるだけ、という世界をつくっていきたい。

能動的なプロジェクト参画から都市を学び取ること

## セッション６　地方プロジェクト、その後

語り手：遠藤新氏、田中大朗氏、野原卓氏

北沢先生は活動の拠点を大学に移した後、岩手県の釜石市や大野村（現洋野町）、神奈川県小田原市、福島県喜多方市、田村市など、様々な地方都市をフィールドとして、研究室のプロジェクトに取り組んでいた。

セッション６では、岩手県釜石市のプロジェクトに取り組む工学院大学教授の遠藤氏、福島県田村市のプロジェクトに取り組む株式会社 TIT の田中氏、岩手県旧大野村のプロジェクトに取り組む横浜国立大学准教授の野原氏が話し手を務めた。

### - はじめたことを最後までやりきること

北沢先生とともに取り組んでいた岩手県旧大野村のプロジェクトでつくられた縁から、現在岩手県西和賀町においてプロジェクトが進行している。ここでは、研究室の学生とともに DIY で場づくりをしている。ここで重要なことは、責任を持って最後までやりきるということ。小さなことからはじめて、そのことを最後までやり続ける、ということは北沢先生の教えである。

北沢先生と、アメリカのセントポールにおけるアーバンデザインの研究をしていた。そこでは、アーバンビレッジの取り組みがされており、大半の計画が実現した。アーバンデザイン事務所が 2015 年に役割を終えて引退し、地域の住民の協議会へ役割を引き継いだ。プロジェクトのしまい方、責任を持った繋げ方ができた事例として大切にしたい。

### - 地方都市で築いた信頼関係

北沢先生からの誘いで福島県田村市に移り住み、４年間地域の人の話をじっくり聞いて、課題や資源を丁寧に拾い上げて街のビジョンを描いていくということをした。2011 年に東日本大震災の原発事故で田村市の一部が避難指示エリアとなり、復興計画をつくる必要が出てきたが、信頼関係の蓄積を活かして復興住宅の設計にも携わることができ、さらにはそれをきっかけに都市デザインと建築設計を手がける事務所を立ち上げたことを北沢先生に報告したい。

### - １人でも人が暮らす場所にはアーバンデザインがある

岩手県旧大野村はとても小さな村であるが、「ここにもアーバンデザインがある」ということが北沢先生の言葉である。地域住民が使える工房や児童館の取り組みは今でも地域に根付いている。残せない建物は実測して記録を残すなど、小さな取り組みを積み重ねてきた。

北沢先生の故郷である福島県の喜多方市では、先生とともにメインストリートの整備に取り組んだが、来年の東京オリンピックの聖火リレーのコースになる。また、市民主体のプロジェクトが都市景観大賞を受賞する、地域の一部が重伝建に選定されるなど、北沢先生が蒔いた種の花が咲いている。

福島県田村市における復興計画

福島県喜多方市におけるローカルアーバンデザイン

## セッション７　UDC（アーバンデザインセンター）の展開

語り手：出口敦氏、三牧浩也氏、前田英寿氏

北沢先生は 2005 年に柏の葉キャンパスにある東京大学大学院新領域創成研究科の教授となり、この頃から柏の葉キャンパス周辺のまちづくりへ参画。2006 年には UDCK 柏の葉アーバンデザインセンター長となり、公民学連携によるアーバンデザインの新しいかたちを実現させた。2009 年 12 月、56 歳の若さでこの世を去るが、その後の全国に広がった UDC の中心として、出口東大教授らのもと、UDCK の活動は大きく発展していく。

セッション７では UDCK センター長であり東京大学空間計画研究室教授の出口氏、UDCK 副センター長である三牧氏、芝浦工業大学教授の前田氏が話し手を務めた。

### - 公民学の連携というコンセプト

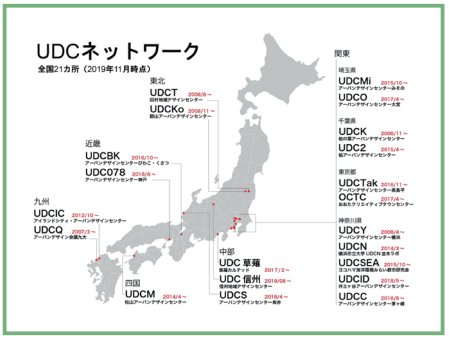
地域の課題は地域によってまちまちだが、北沢先生が提唱した公民学連携というコンセプトは自治体の首長や地域でまちづくり活動をしている人の琴線に触れている。行政の外郭団体でもなく、大学の下部組織の研究センターでもない。UDC は公民学がフラットにお金・人・施設を持ち寄ってつくられる組織である。このような全国的にも珍しい組織であるが、今や全国に 21 箇所。今後も広がりを見せていくのではないか。

### - アーバンデザインセンター設立の目的

ストリートデザインや社会実験などミクロなアーバンデザインも重要ではあるが、本来 UDC ができた目的は、開発や再開発の力を利用して都市の構造をつくっていくこと。都市・建築は時代とともに変化していくが、古いものを活かしながら新しいキーワードをまちにどんどんと打ち込んでいき、それを求心力にして新しい挑戦をしていくべき。

### - 今後のアーバンデザインセンターの展開

公民学が揃えば UDC を設立できるということにしている。公民学それぞれは変わらずとも、UDC を設立すれば公民学の関係性が調整されて事態が好転するというように、UDC の存在を過信している状況も見受けられる。公民学がそれぞれの輪郭を変える、敷居を低くするなど、それぞれが変わりながら仕掛け作りをしていく必要がある。




全国に展開する UDC ネットワーク

柏の葉のアーバンデザイン

# それぞれの“今年の一枚”

*Lab Members' "The Best Photograph of the Year."*

text_OTAKE / M1

12月26日に行われた研究室忘年会で、各研究室メンバーが“今年の一枚”を発表しました。これは忘年会の恒例行事。皆さんは今年はどのような一年でしたか？

ロスアマンテスの噴水
ルイス・バラガン、メキシコシティ

## 教授｜宮城俊作先生

1986年の初夏、GSDの修士課程を修了し、北米大陸の各地を放浪していた私がその途上で立ち寄ったのがこの場所。当時の色彩はここまでビビッドに再現されてはいなかったが、明快な造形とコンポジション、美しいプロポーションは、当時の記憶を呼び覚ますに十分刺激的だった。33年の歳月を経て再訪できたことがとても嬉しく、なんとなく当時の自分の心情に立ち戻ったような気分だった。

## D1｜玄田悠太

1924年の成蹊学園移転を契機に独自の地域性を形成している武蔵野市の成蹊大学地域。そこのアントニン・レーモンド設計で1934年に竣工した旧赤星鉄馬邸。現在ナミュール・ノートルダム修道女会東京修道院となっていますが、この文化財の保存・活用に関する活動をご一緒しています。場所の価値、継承の系譜、地域の想いを丁寧に紡ぎつつ、より良い将来へつながるお手伝いができれば。

## M2｜前山倫子

初めて見た千葉都市モノレールはかっこよくて、私にとって"未来の"風景でした。でも、次の世代が描く"未来"は、多分こんなふうに大きくて固いものじゃない。きっとこれから私の感覚はどんどん古くなる。価値観を止めたくない。新しくいたい。

## M1｜繆 思然

富士吉田PJで旧郵便局を改修した。火祭りの日に大勢の地元の方や観光客が押し寄せてきて、心打たれた瞬間を撮った。プランナーが政府、個人と社会全体の間で斡旋して都市の発展を考える必要があることについての理解を深めた。

## B4｜鈴木直樹

2018年夏から石川県加賀市山代温泉に隣接する里山再生に向けた活動をしています。今年度は子どもたちと里山の自然や歴史、文化を体験する「薬師山探検隊」をしており、これはその時の写真です。里山の将来像を描く卒業制作にも取り組んでいます。

# Information

**毎年忙しくなるこの時期。年末年始は対外協議がお休みになる分、個人作業に集中できるという声が聞こえてきますが、皆さんはどう過ごしますか？**

## Hey listen, -ちょっと聞いて！

**12.3 空き地現地調査**

浦安PJで空き地の現在の使われ方を記録し、将来に残す活動をしています。「面白い」と感じる自分たちと、刻々と変化していくまちの狭間でもがいている PJです。(M1 應武)

**12.14　生き物観察会**

手賀沼フィッシングセンターで生き物観察会を開催し、この時期ながら沢山の方に来て頂きました。メンバーも生き物を同定できるようになってきました。(M1 西野)

**12.19 森市長にインタビュー**

富山PJでは森富山市長にインタビューを行いました。富山のコンパクトシティの原点とこれからについて語っていただき充実したものになりました。(M1 佐鳥)

**12.21 建て替え検討に向けた調査！**

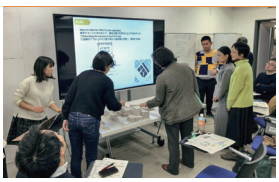
国道拡幅後の沿道住宅の建て替えパターンの検討に向けて、敷地・建物の実態調査と建物の変遷や歴史についてのヒアリング調査をしました。(M1 宗野)

## 12月のWebマガジン

http://ud.t.u-tokyo.ac.jp/ja/blog/

**12.7-8 堂々の最優秀賞受賞**

12月7日に行われたU-30復興デザインコンペにおいて砂川のチームの作品が最優秀賞を受賞しました。(M1 佐鳥)



**12.26 スタジオ最終ジュリー**

大学院スタジオ演習の最終発表の様子をお伝えします。各チーム個性豊かな内容でした。(M1 園部)

## 1月の予定

**Lab Meeting**
**7th, 9th, 24th**

| | |
|---|---|
| 9th (Thu.) | 富士吉田PJ　道路拡幅事例調査@町田市 |
| 11th - 13th | GSD Japan Trek 2020 |
| 21st(Tue.) | 小高PJ　住民インタビュー |
| 24th(Fri.) | 三国PJ　サイン報告会@UDCS |
| 27th - 28th | 修論審査 |
| 31st - 2/2 | 内子PJ　森家試験的公開 |

## 編集後記

横浜育ちの私にとって、緑豊かな山手地区の歴史的建造物群は当たり前に存在するものであったし、学部の設計スタジオで度々対象地とされた横浜の創造界隈においては、それを設計の手がかりにし、利用する側の立場であった。今回、それらは1人の人間が、周りを巻き込みながら信念を持ち取り組み続けた結晶であるということを身にしみて感じた。さらに、来場者の話し振りから先生の人柄が、旅立たれてもなおこんなにも多くのファンを惹きつけているということに驚いた。今回の特集を通して、ロールモデルに出会うことができた。(M1 宗野)

## ■ マガジンへのご意見・ご感想をお寄せください

ご意見やご感想を投稿していただけるフォームを試験的に開設いたします。
QRコードまたはURLよりアクセスし、お気軽にご投稿ください。
URL：https://forms.gle/M33De1hfNReuMDxJ7